

シリーズ

人

と

ま

つ

り

第3回

# みちのく民話まつり

## 猫を褒めろ、漬け物を褒めろ

昭和44年（1969）から昭和45年（1970）頃にかけての冬、当時高校教員だった大友義助さんは、オープンリールの重い大型レコーダーを背負い、バスを乗り継いで、新庄市在郷のお年寄りを訪ね歩いた。新庄市教育委員会からの「地元で伝わる民話を採話してまとめてほしい」という依頼を受けてのことだった。

それまでも一部の研究者や志を持つ愛好家の手によって民話の採集は行われていたが、行政が関与して民話集を取りまとめるなどということは、当時としては全国的にも例をみない画期的なことだった。その頃は、民話などの民衆文化は、官が口出しをすべきものではなかったのだ。

大友さんも勤めの身であるから、採話に歩けるのは日曜や休日だけ。しかも、お年寄りたちの話をじっくり聞けるのは雪の降りしきる冬場に限られていた。農家のお年寄りといえども、春夏秋は孫遊ばせや野良仕事の手伝いに追われて、昔話などを語っている暇はない。しかし季節が巡り雪が降れば、家の者たちも外に出られない。農家には、冬場には冬の仕事があるが、それでも春夏秋に比べればはるかに余裕があり、お年寄りたちは孫遊ばせから解放されて、隣近所の友達と茶飲み話に興ずる。

大友さんが雪で真っ白になりながら目指す家の戸口に立つと、婆ちゃんたちは「寒がったべ、上がれ、上がれ」と愛想良く迎え入れてくれる。しかし、ようやく座敷に上がって「昔話を聞かせて下さい」などと願っ

【新庄民話の会】の代表的な語り手の一人だった  
タケヨ婆ちゃんの外出……

（写真：伊藤タケヨ著『九十才 来た道は散歩みち』より）

「まつり」の原義は、神仏にもものを献上したり差し上げる意味の「奉る（たてまつる）」と同源と言われる。それは、人々の豊穰への願いと、恵みへの感謝と祈りをささげる行為である。また、「まつり」の古い意味はしきたりに従うことであるとも言われる。しきたりに従うとは、季節が繰り返しても、世代や歳月を超えて、力を合わせて大切なものを未来へ伝える人の営みである。このシリーズでは県内各地のユニークなまつりや催しを取り上げ、それを支える人々の思いや関わりにスポットを当てながら、地域の過去と未来について考えていきたい。

でも、「そんな話は今は語らねがら、みな忘れてすまた」  
「あんなつまらねえ話は、(洋)服着た人にあ恥ずがす  
くて語らんねえ」などと言われるのがオチである。そ  
もそも昔話などと言っても、彼女らには何のことか分  
からない。昔話とは彼女らがまだ若かった頃か、それ  
よりもう少し昔の世間話なのだ。

そんな時、大友さんは、囲炉裏端や炬燵の周りに決  
まってわが物顔で鎮座する猫を見て「いい毛並みだ」  
と褒める。そして、勧められるままにお茶を飲み、井  
いっばいに盛られたおいしい漬け物を食べ、その作り  
方を聞く。昔話を聞けるのは、そうした世間話をしば  
らく続けた後のことである。このようにして採話した  
民話の数は、テープの本数で300本を超えたという。

この頃の様子を、大友さんは「囲炉裏端の、あるいは  
炬燵のなかの昔話りの世界はまったく別天地だった。  
それぞれの人の昔話・伝説はもちろん面白かったが、  
語り手一人ひとりがたどってこられた道のりの話は、  
これに劣らず面白かった。彼女らは、一般にいう昔話  
も伝説も、わが家の先祖のこと、わが村のこととして  
話してくれた。それだけに、語りは真剣であり、話に  
力があつた」と語る。

このようにして19人の語り手から採話した155の昔  
話が『新庄のむかしばなし』(新庄市教委刊)として  
まとめられ、昭和46年(1971)9月に刊行された。こ  
れが、後の新庄の民話の里づくりの基礎となった。

## 昔々、あつたけど(語りの伝承)

昔話は、かつて、祖父母によって語られることが多  
かった。それも四季を通してではなく、主に冬期、吹  
雪がひどくて戸外で遊べないときや、夜、寝床のなか  
で眠りにつくまでのひと時であった。

農家の父や母は冬でも、あるいは夜でも、わら仕事  
や針仕事をしなければならぬから、子どもたちに面  
白い昔話や伝説を語って、父母の仕事の邪魔になら  
ないように、子どもたちを引きつけておくのが祖父母  
の役目でもあつた。それができなければ、若夫婦から一  
丁前のない年寄りと呼ばれた。昔話を語ることは、一  
家の暮らしを支えるための、年寄りの大事な仕事だ  
つたのだ。それで年寄りたちは、隣近所、寄り合つて互  
いに話の交換をしたという。

ところで、父母であれ、祖父母であれ、子どもに昔  
話を語って聞かせる時の気持ちはどのようなものだ  
つたろうか。かわいい盛りのわが子や孫に語り聞かせる  
話である。おそらくは、この子らは、何としても心身  
無事に成長して欲しい、世の荒波に打ち勝つて、たく  
ましく人間らしく生きていって欲しいとの一念であつ  
たに違いない。

民話は、必ずしも楽しく、心地よい話ばかりではな  
い。悲しい話や、どう考えても理不尽な話、残酷で聞  
くに堪えないような話も数多くある。それでも、父母



第18回「みちのく民話まつり・冬語り」(旧矢作家住宅) 写真提供:新庄ふるさと歴史センター



や祖父母は、かつて自分が子どもの頃聞いたと同じように、子どもたちに語る。ことさらに家庭教育などと言わなくても、昔話を通じて子供たちは世の摂理をおぼえ、人間としての優しさや思いやり、生きるうえで拠って立つ根源的な心の力がはぐぐまれてきたのだろう。

しかし、社会の暮らしぶりが変わり、家族形態も変わった。農村においてさえ、祖父母から伝え聞いた昔話をそのまま語り継ぐ人は皆無に近づいている。特に、テレビが普及したことによって、家庭での語りの方は壊滅的なダメージを受けた。

すでに、祖父母が子どもたちに昔話を語る情景を思い描くこと自体が、遠い昔話のようでさえある。

## 昔語りの聞こえる街並み

大友さんが『新庄のむかしばなし』をまとめてから十数年後の昭和60年（1985）に、県の民話調査が行われた。そこで採話できた市内の語り手は6名に過ぎず、『新庄のむかしばなし』で昔話を語ってくれたお年寄りには、ほとんどの方がすでに亡くなっていた。

「このままでは、地域の語り手が消えていく…」市民有志や行政・教育関係者の間に危機感がつり、「東の遠野 西の新庄」を合い言葉に、岩手県遠野市に負けない民話の里づくりを目指そうとの気運が盛り上がった。市民有志を中心に「新庄民話の会」発起人会が結成され、最上全域に参加を呼びかけたところ、昔話を語りたいお年寄りや、語り継ぎたい主婦、保母さんなど、老若男女53名から申し込みがあった。お年寄りの中にも、得意の昔話を語りたくてもすでに家の中では語る機会すらないことへのフラストレーションがたまっていたのだ。

こうして昭和61年（1986）3月に、大友義助さんが会長（現名誉会長）となり「新庄民話の会」が設立され、事務局は新庄ふるさと歴史センターに置かれた。昭和62年（1987）2月には、会の活動の一環として、市教育委員会と提携して、第1回「みちのく民話まつり」が開催された。以降、「みちのく民話まつり」は新庄市泉田の旧矢作家住宅（国指定重要文化財）をメイン会場として毎年開催され、今年で22回目を迎える。このまつりには、新庄市出身の俳優・庄司永建さんも毎年のように参加して、自ら流ちょうな昔語りを披露している。

さらに、平成7年（1995）から11年（1999）度にかけて、市の中心商店街の街路に、5つの民話をテーマにした“昔語りの聞こえる道づくり”が行われた。各街路には〈金の茶釜〉や〈かわうそと狐〉〈笠地藏〉

などの民話の各場面がさまざまな素材によるモニュメントとして設置され、それをたどるとひとつの民話がかかるよう工夫されている。

平成15年（2003）に開催された第18回国民文化祭の時には、新庄市で「神室民話の里語りフェスティバル」が盛大に開催され、同時に、街の中でも民話を聞けるようにしようと、6つの商店を一定時間『民話茶屋』に衣替えしてもらい、民話の会の会員と市内小学校の民話クラブの子どもたちが語り手として配置され、誰でも、民話を聞きに入店できるようにした。

こうして、民衆のひそやかな営みに過ぎなかった昔語りは、地域の貴重な財産として意識されるようになり、民話の里づくりは、住民・行政双方の協力による市をあげた取り組みとして定着してきた。



街路に建つ民話モニュメント（北本町商店街「笠地藏どおり」）

## 今に生きる語り手たち

「新庄民話の会」の会員の一人である鈴木久子さんが民話の魅力に取り付かれ、語りの世界に入ったのは、新庄市蛇塚の佐藤ミナエさん（故人）との出会いがきっかけだった。鈴木さんは、ミナエさんの「文学的」な語り口調や、女性としての優れた人間性に強く惹かれたという。

ミナエさんは200話以上の昔話を語り分ける語りの名人だった。その話の内容は村の生活にぴったりと寄り添い、時として村社会のなかの隠微な性情をも扱う、大人のための「本格昔話」であったが、いったん話が始めると、昔話と自分の生活経験や苦勞話、果ては村のうわさ話までが混然となり、その語りは変幻自在でとどまるところを知らず、一晚中語り明かすことも珍しくなかったという。

ミナエさんは、幼少の頃から盲目の祖父を助けて按摩の手引きとして働き、とうとう文字を知ることなく成長した。昔話はその祖父から伝え聞いたものだが、

ミナエさんの語りは、完全な口承の世界だからこそ、文字情報に縛られることのない自由奔放さと、大胆さを孕んでいたのかもしれない。

鈴木さんがミナエさんと親交を深めていた昭和56年(1981)頃から、俳優の山口崇さんが民話を採話したいと山形県を訪れるようになった。山口さんはミナエさんとも大変に親しくなり、昔話を聞きたいと、年を隔てて何度もミナエさんの家を訪ねて来た。山口さんの案内役を勤めていた大友義助さんは、ある時、山口さんに「多忙を極める仕事のなかで、なぜこのような片田舎のお年寄りを訪ね、昔話など聞いて回るのか」と聞いてみた。すると、山口さんは「私は役者として働いているが、時として一生懸命演じても一向に観客に受けないときがある。それに反して、昔話の語り手は、何ひとつ舞台装置や音楽などが無いにもかかわらず、たった一人で、何人もの聞き手を何時間でも引きつけている。このように相手の心を引きつける昔話の不思議とはなにか。その語り手の心の内を自分の目で確かめたくて、旅を続けているのだ」と答えたという。

昔話りの本当の面白さは、テレビの「日本昔ばなし」のように、シナリオが用意された一方的な語りや、活字だけでは十分に伝わらない。昔話を聞く者は、語りの一節ごとに「おう」とか「おっとう」と相づちを打つのが、語りを聞く際の本来の作法であるようだ。語り手と聞き手が相対し、語り手は、聞き手の呼吸や反応を感じながら、自分のメッセージを民話に託して臨機応変に語りかける。その語り手と聞き手のコミュニケーションの中にこそ、語りの醍醐味がある。その意味では、聞き手の「聞く耳」の質こそ問われるのではないだろうか。

## 民話が引き継ぐ命と心

「みちのく民話まつり」が2～3度開催された頃に、市内小学校の先生方からも、昔語りを学校の課外活動に取り入れたいとの声上がり、4回目のまつりの頃から、子どもたちが語り手として参加する姿が目立ってきた。現在では、市内5つの小学校に「子ども民話クラブ」があり、「新庄民話の会」の会員が指導を行っている。また、主に民話クラブのない小学校を対象に「新庄子ども民話教室」が開講され、最終日には一般公開で「子ども民話まつり」が開催されている。

平成14年(2002)6月に金山町を主会場として開催された第53回全国植樹祭に、天皇・皇后両陛下が来県なされた折、両陛下は新庄ふるさと歴史センターを訪問され、「子ども民話クラブ」のメンバーが両陛下の前で語りを披露する機会に恵まれた。子どもたちの語



語り手の子どもたちにお言葉をかけられる天皇・皇后両陛下

りは実に堂々としており、両陛下は子どもたち一人ひとりに声を掛けられて、「民話の伝承は大切なことだから、今後とも続けて活動して下さい」と、一同を励まされたという。

子どもたちが習い覚えた昔語りは、彼らが成長する過程で、あるいはいつ時、忘れ去る時期があるかもしれない。しかし、やがて大人になり、親となった時、その「語り」は彼らの体を巡る血肉となって、記憶の底からよみがえってくるに違いない。

大友さんは、真室川町川の内の新田小太郎さん(故人)からもたくさんの昔話を聞いたが、なかでも、戦争の時の話が忘れられないという。

小太郎さんは昭和19年(1944)から20年(1945)の敗戦間近の頃、南方ニューギニア戦線の部隊に配属されていた。部隊は壊滅状態で、兵士たちは密林深く身を隠していた。食うものもなく、多くの兵士が極度の衰弱のままに、高熱にうなされて死んでいった。かろうじて生き延びた人々は、互いに出身地の昔話を語り合って、笑いを取り戻し、正気を失わないようにした。ひもじさは変わらないが、一人ひとりの生きようとする気力がよみがえり、活気が出てきた。昔話によって、自分たちの命が救われたというのである。

「新庄民話の会」(現佐藤榮一会長)では、今年度から「新庄むがす語り入門講座」を開講し、市民7名の受講者を迎えて、新たな語り手の育成にも力を入れている。

民話は先祖からのメッセージである、とよく言われる。民話には、先人たちが長い時をかけて積み重ねてきた知恵と心が山ほど込められている。その貴重なメッセージの数々は、最上の豊穰な風土とともに、地元の語り手や子どもたちの手によって、必ずや次の世代にも途切れることなく伝え継がれていくに違いない。

(荘銀総合研究所 主席研究員・加藤和徳)